

第 I 部 調査結果の概要

1 平成 21 年の概況

～生産・出荷は、持ち直しの動きで推移するものの、リーマン・ショック前の 8 割の水準～

- 鉱工業指数は、平成 20 年 9 月のリーマン・ショックにより、記録的な急低下となり、生産・出荷ともに、現行基準で比較可能な平成 15 年以降で、最低の水準（生産 78.6〔前年比▲26.1%低下〕、出荷 83.9〔▲23.0%低下〕）となった。
- 四半期でみると、生産・出荷ともに、Ⅰ期(1～3月)を底（生産 69.4、出荷 73.2）として、Ⅲ期(7～9月)まで、持ち直しの動きで推移したが、Ⅳ期(10～12月)には、持ち直しのペースが鈍化し、水準はショック前の 8 割程度に止まった。

《生産》Ⅰ期…▲26.4%低下、Ⅱ期…5.9%上昇、Ⅲ期…14.7%上昇、Ⅳ期…3.8%上昇

《出荷》Ⅰ期…▲24.0%低下、Ⅱ期…7.4%上昇、Ⅲ期…15.3%上昇、Ⅳ期…2.9%上昇

(1) 鉱工業生産指数

鉱工業生産指数は、78.6（前年比▲26.1%低下）。昨年に続き、2年連続で前年を下回った（図1）。業種別にみると、一般機械工業を筆頭に、現行基準で比較可能な平成15年以降で初めて19業種全てが低下した（図2）。

(2) 鉱工業出荷指数

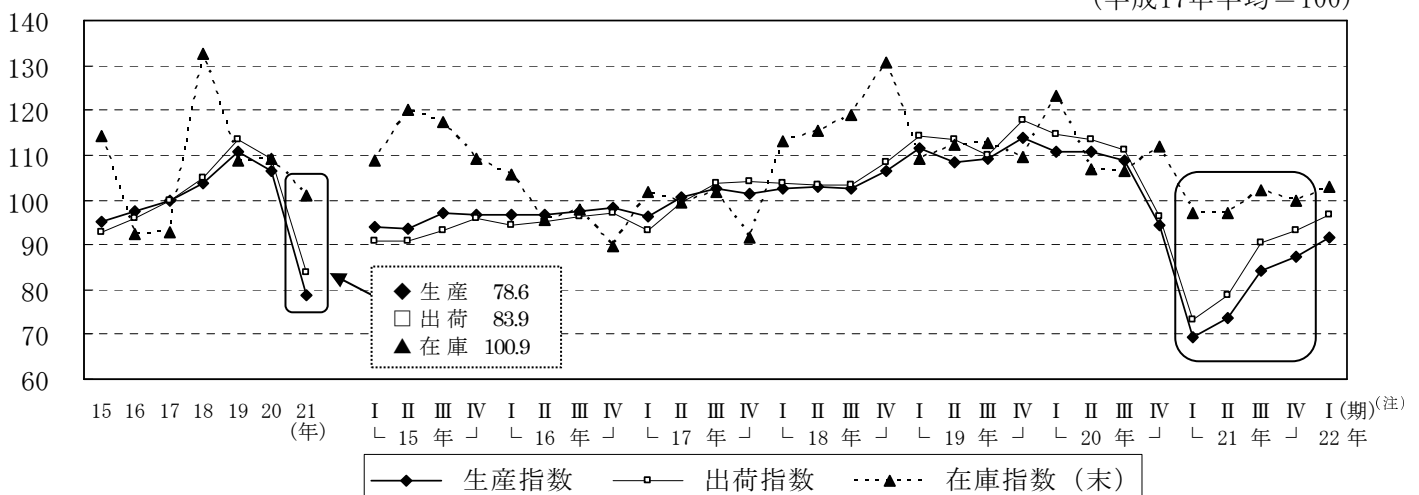
鉱工業出荷指数は、83.9（前年比▲23.0%低下）。昨年に続き、2年連続で前年を下回った（図1）。業種別にみると、輸送機械工業を筆頭に、現行基準で比較可能な平成15年以降で初めて19業種全てが低下した。

(3) 鉱工業在庫指数（末）

鉱工業在庫指数（期末在庫）は、100.9（前年比▲7.6%低下）。2年ぶりに前年を下回った（図1）。業種別にみると、電気機械工業（総合）、プラスチック製品工業、食料品・たばこ工業の3業種が上昇し、鉱業が横ばいだったが、鉄鋼業、輸送機械工業など14業種が低下した。

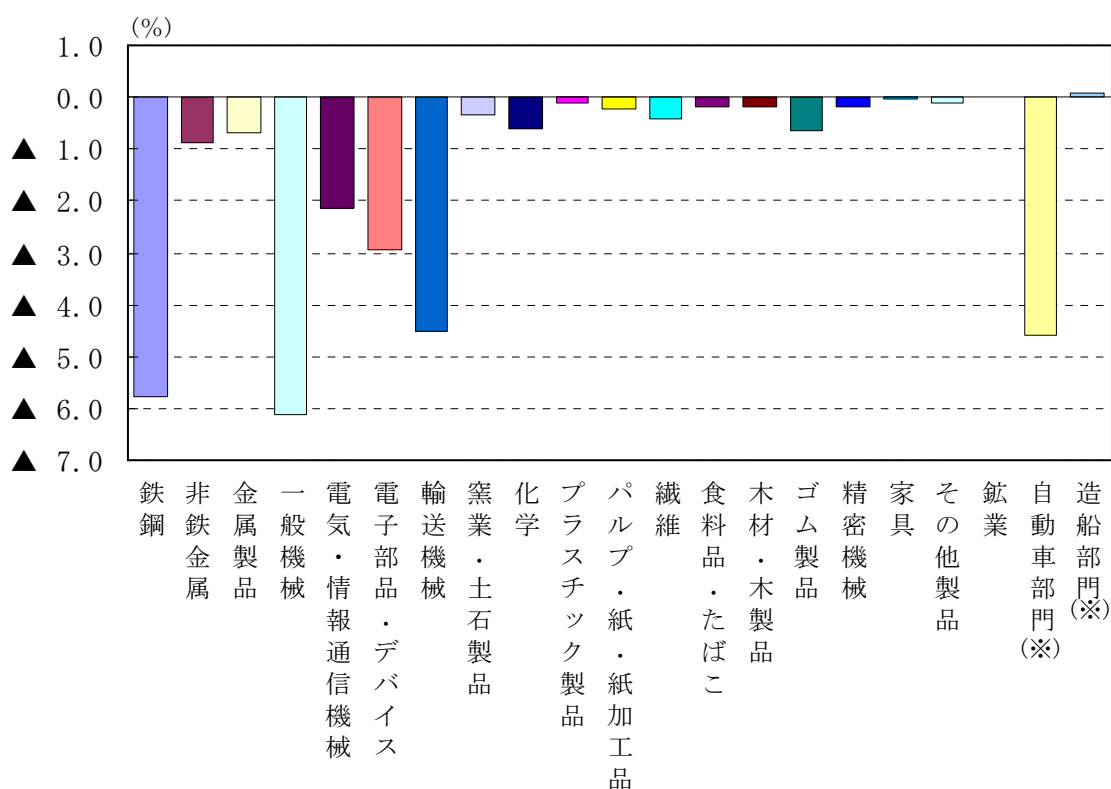
図1 鉱工業指数の推移（年は原指数、四半期は季節調整済指数）

（平成17年平均＝100）



（注）Ⅰ期：1～3月、Ⅱ期：4～6月、Ⅲ期：7～9月、Ⅳ期：10～12月

図2 平成21年における鉱工業生産指数の前年比に対する業種別寄与度^(注)



(注) 寄与度とは、鉱工業指数全体の上昇・低下に対し、各業種の上昇・低下が、どの程度影響を与えているかを示したものである。

(※) 自動車部門及び造船部門については、輸送機械を分けたものである。

2 生産の業種別動向（寄与度順）

(1) 前年比が上昇した主な業種

上昇した主な業種	前年比	寄与度	上昇した主な品目
該当なし	—	—	該当なし

(2) 前年比が低下した主な業種

低下した主な業種	前年比	寄与度	低下した主な品目
一般機械工業	▲42.8%	▲6.1%	シヨベル系掘削機, 印刷機械, 研削盤
鉄鋼業	▲24.6%	▲5.8%	鋼帯, 鋼半製品, 粗鋼
輸送機械工業	▲26.0%	▲4.5%	普通自動車, ガソリンエンジン, シャシー及び車体部品
電子部品・デバイス工業	▲28.7%	▲2.9%	半導体集積回路, モス型半導体集積回路(CCD), モス型半導体集積回路(ロジック)
電気・情報通信機械工業	▲39.2%	▲2.1%	自動車用電気照明器具, 携帯電話, 低圧遮断機

3 関連業種別生産指数の推移

機械関連業種、素材関連業種、生活関連業種、いずれも大幅な低下

業種別の生産指数を、機械関連業種、素材関連業種、生活関連業種の3関連業種に分けて分析すると^(注)、平成21年は、3関連業種全てで前年を大幅に下回った(図3)。

関連業種別にみると、機械関連業種、素材関連業種は、2年連続の低下となり、生活関連業種は、4年連続の低下となった。平成21年の低下は、3関連業種全てにおいて、大幅なものとなった(図4)。

図3 鉱工業生産指数の前年比の推移

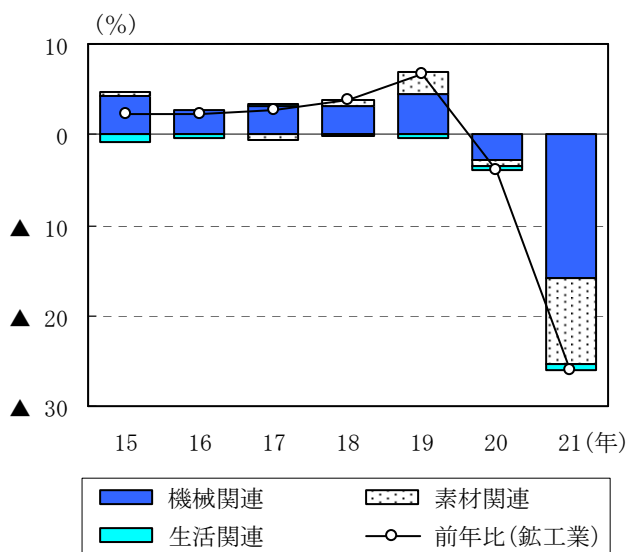
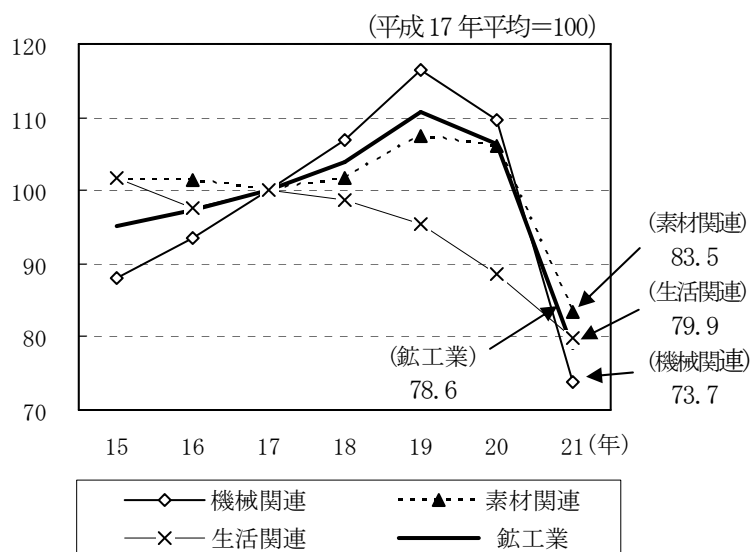


図4 関連業種別生産指数の推移



(注) 各関連業種の分類は、次のとおりとした。

機械関連業種：一般機械工業、電気・情報通信機械工業、電子部品・デバイス工業、輸送機械工業、精密機械工業の5業種

素材関連業種：鉄鋼業、非鉄金属工業、金属製品工業、窯業・土石製品工業、化学工業、プラスチック製品工業、パルプ・紙・紙加工品工業、木材・木製品工業、ゴム製品工業の9業種

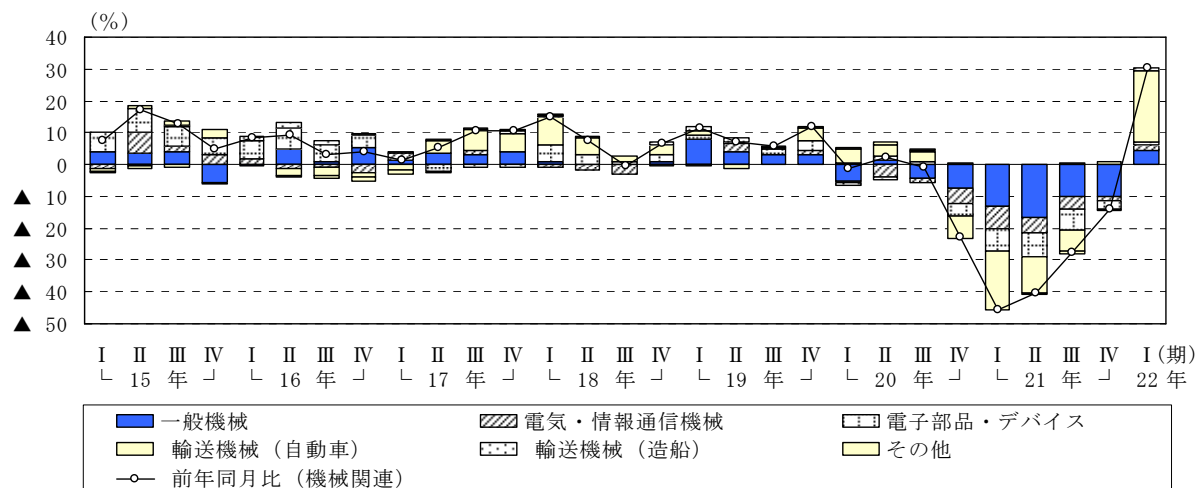
生活関連業種：繊維工業、食料品・たばこ工業、家具工業、その他製品工業の4業種

(1) 機械関連業種の生産指数の推移

機械関連業種の生産指数は、平成21年1~3月期を底に緩やかな回復傾向

機械関連業種の生産指数は、平成20年7~9月期から低下が始まり、平成20年10~12月期以降、輸送機械工業(造船部門)を除く全ての業種で急速に低下し、平成21年1~3月期には、記録的な低下(前年同期比▲45.5%低下)となった。その後、下落率は縮小し、10~12月期に輸送機械工業(自動車部門)が5期ぶりにプラスに転じた(前年同期比2.4%上昇)が、総じてマイナスで推移した(図5)。

図5 生産指数（機械関連業種）の前年同期比の推移



① 一般機械工業

一般機械工業の生産指数は、58.4（前年比▲42.8%低下）。機械関連業種のみならず、全業種の中で最も低下に寄与した。一般用蒸気タービンなどが上昇したが、シヨベル系掘削機などが低下に大きく寄与した。四半期ごとにみると、平成20年7～9月期から平成21年10～12月期まで6期連続で前年同期を下回り、平成21年4～6月期には現行基準で比較可能な平成15年以降で最大の下落率となった（前年同期比▲52.6%低下）。

② 電気・情報通信機械工業

電気・情報通信機械工業は、48.5（前年比▲39.2%低下）。電気計器などが上昇したが、自動車用電気照明器具、携帯電話などが低下に大きく寄与した。四半期ごとにみると、平成20年4～6月期から平成21年10～12月期まで7期連続で前年同期を下回り、平成21年1～3月期には現行基準で比較可能な平成15年以降で最大の下落率となった（前年同期比▲55.1%低下）。

③ 電子部品・デバイス工業

電子部品・デバイス工業は、84.5（前年比▲28.7%低下）。半導体集積回路、モス型半導体集積回路（CCD）などの順で、全ての品目が低下に寄与した。四半期ごとにみると、平成20年10～12月期から平成21年10～12月期まで5期連続で前年同期を下回り、平成21年4～6月期には現行基準で比較可能な平成15年以降で最大の下落率となった（前年同期比▲35.7%低下）。

④ 輸送機械工業（自動車部門）

輸送機械工業（自動車部門）は、87.3（前年比▲31.3%低下）。普通自動車、ガソリンエンジン、シャシー及び車体部品などの順で、全ての品目が低下に寄与した。四半期ごとにみると、平成20年10～12月期から平成21年7～9月期まで4期連続で前年同期を下回り、1～3月期には現行基準で比較可能な平成15年以降で最大の下落率となった（前年同期比▲58.6%低下）が、その後、10～12月期は5期ぶりにプラスに転じた（前年同期比2.4%上昇）。

⑤ 輸送機械工業（造船部門）

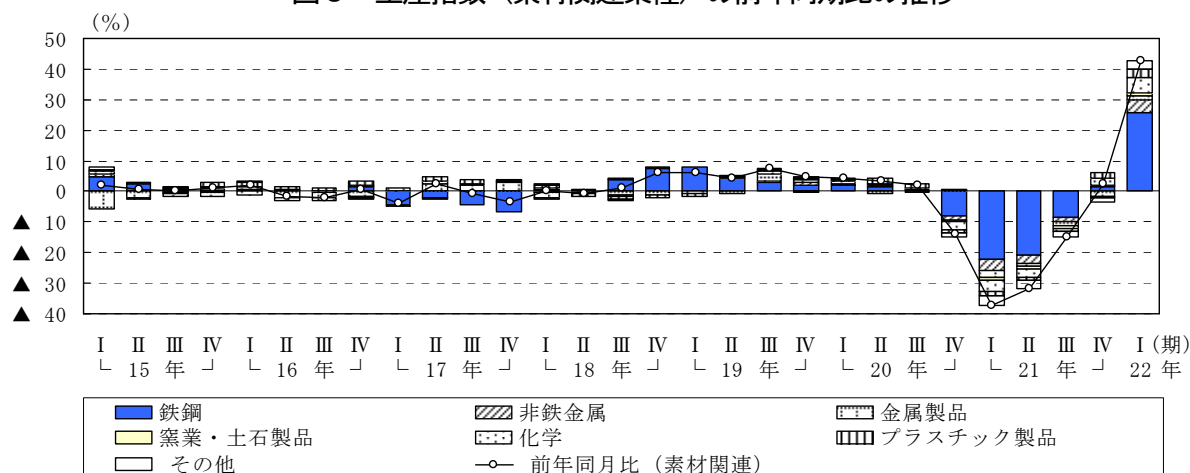
輸送機械工業（造船部門）は、114.7（前年比2.5%上昇）。鋼船修理は低下したものの、鋼船新造は上昇した。四半期ごとにみると、平成20年7～9月期から平成21年7～9月期まで5期連続で前年同期を上回っていたが、10～12月期は6期ぶりに前年同期を下回った。（前年同期比▲2.2%低下）

（2）素材関連業種の生産指数の推移

素材関連業種の生産指数は、平成21年1～3月期を底に回復傾向で推移

素材関連業種の生産指数は、平成20年7～9月期以降、鉄鋼業が最も低下に寄与し、平成21年1～3月期まで急速に低下した。四半期ごとにみると、平成21年1～3月期以降、回復傾向にあり、10～12月期以降はプラスに転じた（図6）。

図6 生産指数（素材関連業種）の前年同期比の推移



① 鉄鋼業

鉄鋼業の生産指数は、84.2（前年比▲24.6%低下）。軌条が上昇したものの、鋼帯、鋼半製品などが低下に寄与した。四半期ごとにみると、平成20年10～12月期から平成21年7～9月期まで4期連続で前年同期を下回っていたが、10～12月期は5期ぶりにプラスに転じた（前年同期比3.1%上昇）。

② 金属製品工業

金属製品工業は、81.4（前年比▲15.5%低下）。水門などが上昇したが、橋りょう、電気溶接棒などが低下に寄与した。四半期ごとにみると、平成21年1～3月期から平成21年10～12月期まで4期連続で前年同期を下回った。

③ 化学工業

化学工業は、79.5（前年比▲16.7%低下）。フェノール樹脂などが上昇したが、ポリスチレン、メタクリル酸エステル・モノマーなどが低下に寄与した。四半期ごとにみると、平成20年7～9月期から平成21年7～9月期まで5期連続して前年同期を下回っていたが、10～12月期は前年同期を上回った（前年同期比34.9%上昇）。

④ プラスチック製品工業

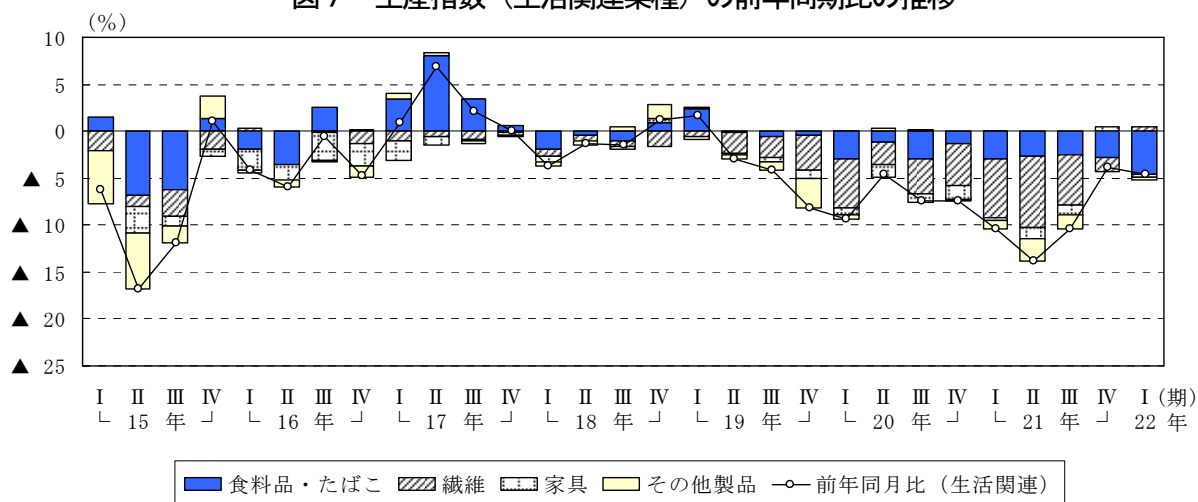
プラスチック製品工業は、99.4（前年比▲2.1%低下）。光学フィルムなどが上昇したが、強化製品などが低下に寄与した。四半期ごとにみると、平成20年10～12月期から平成21年4～6月期まで3期連続で前年同期を下回っていたが、7～9月期以降は前年同期を上回った。

(3) 生活関連業種の生産指数の推移

生活関連業種の生産指数は、マイナスで推移

生活関連業種の生産指数は、平成21年10～12月期に、家具工業、その他製品工業が前年同期を僅かに上回った他は、前年同期を下回り、総じてマイナスで推移している（図7）。

図7 生産指数（生活関連業種）の前年同期比の推移



① 食料品・たばこ工業

食料品・たばこ工業の生産指数は、92.5（前年比▲4.0%低下）。乳飲料などが上昇したが、清涼し好飲料などが低下に寄与した。四半期ごとにみると、平成19年4～6月期から平成22年1～3月期まで12期連続で前年同期を下回っている。

② 繊維工業

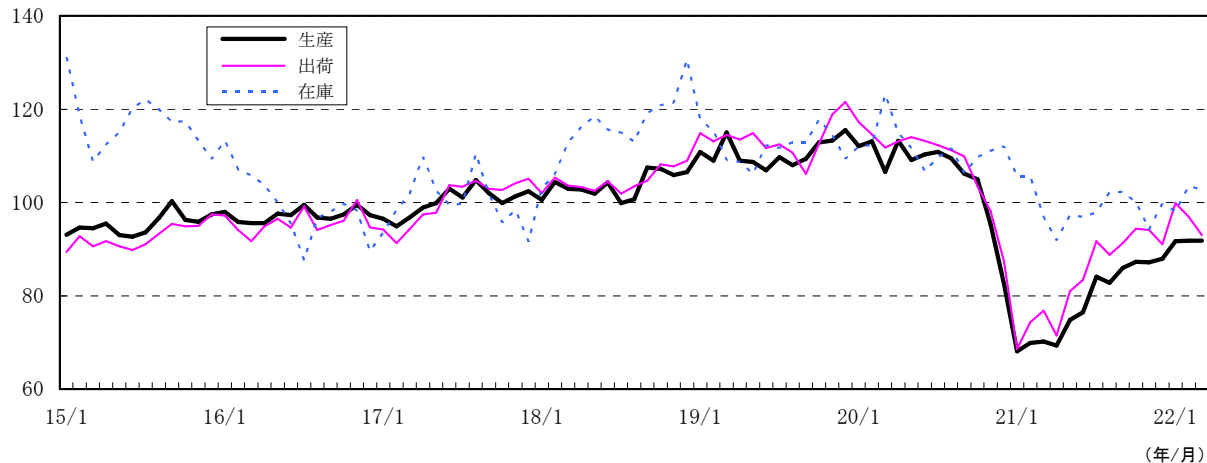
繊維工業は、52.7（前年比▲26.7%低下）。漁網などが上昇したが、織物製外衣、化学合成繊維などが低下に寄与した。四半期ごとにみると、平成16年7～9月期から平成21年10～12月期まで22期連続で前年同期を下回った。

③ その他製品工業

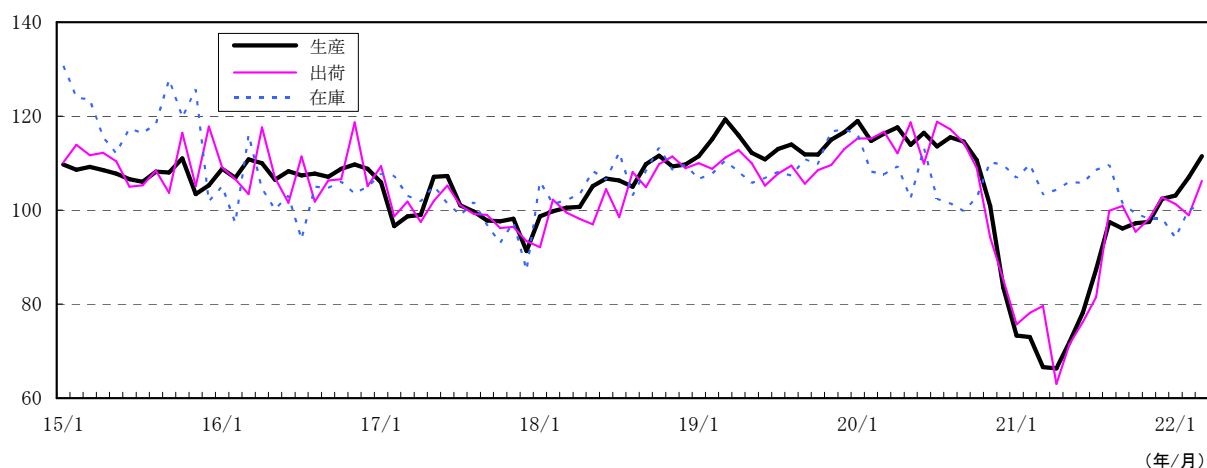
その他製品工業は、79.3（前年比▲12.7%低下）。ボールペンなどが上昇したが、手縫針、電動玩具などが低下に寄与した。四半期ごとにみると、平成20年10～12月期から平成21年7～9月期まで4期連続で前年同期を下回っていたが、10～12月期には5期ぶりにプラスに転じた（前年同期比0.2%上昇）。

4 主要業種別季節調整済指数の推移 (平成17年平均=100)

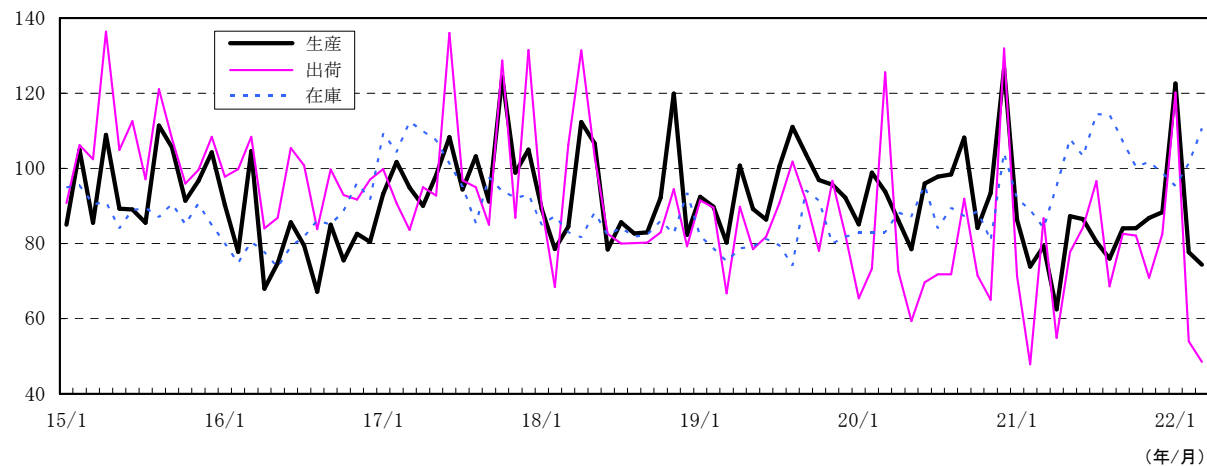
鋳工業 (付加価値額ウェイト=10000.0)



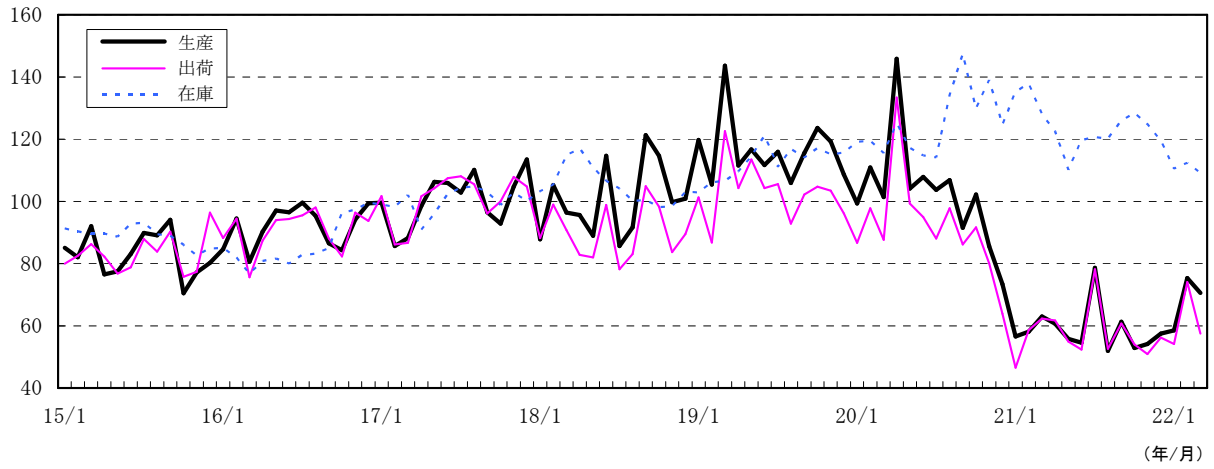
鉄鋼業 (付加価値額ウェイト=2230.6)



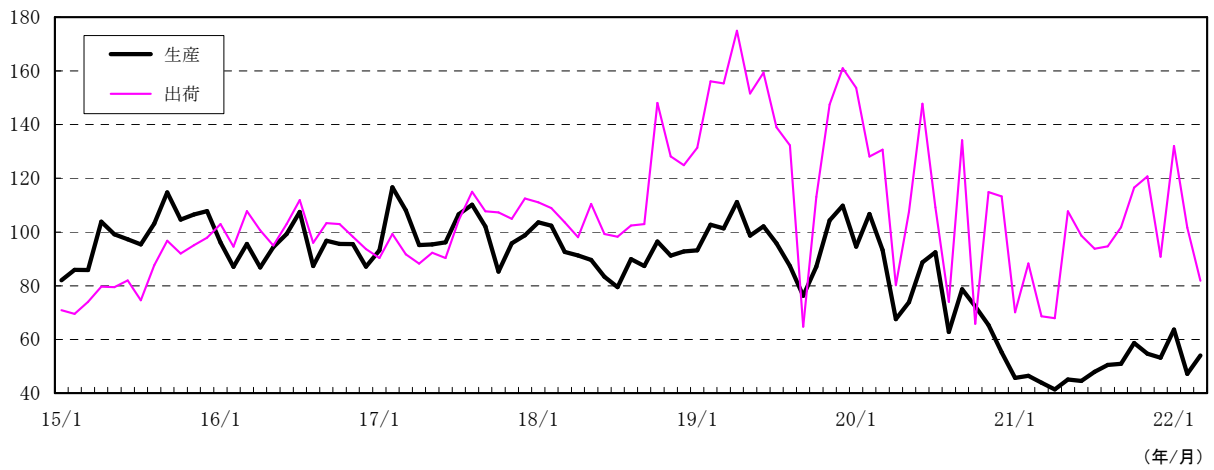
金属製品工業 (付加価値額ウェイト=475.0)



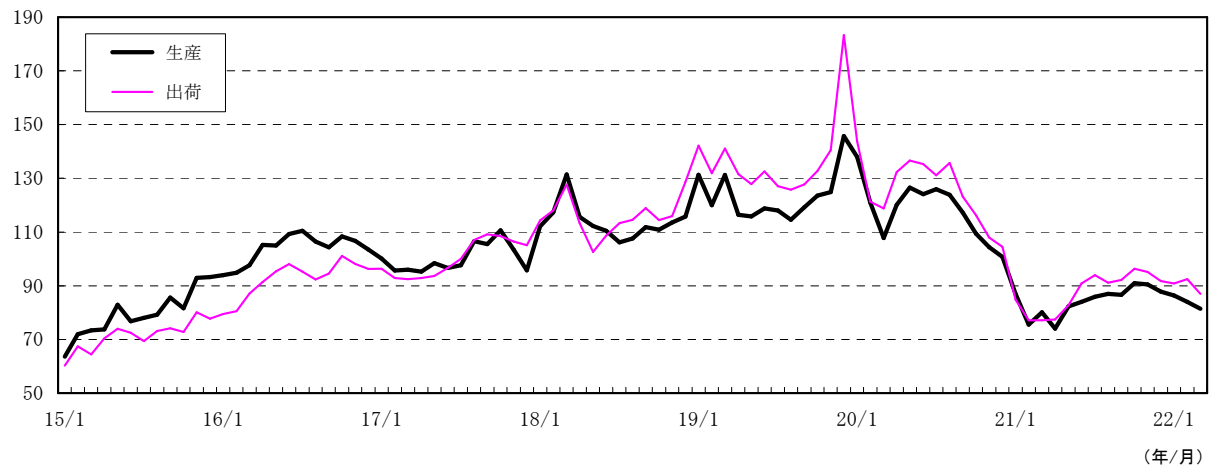
一般機械工業（付加価値額ウエイト＝1489.5）



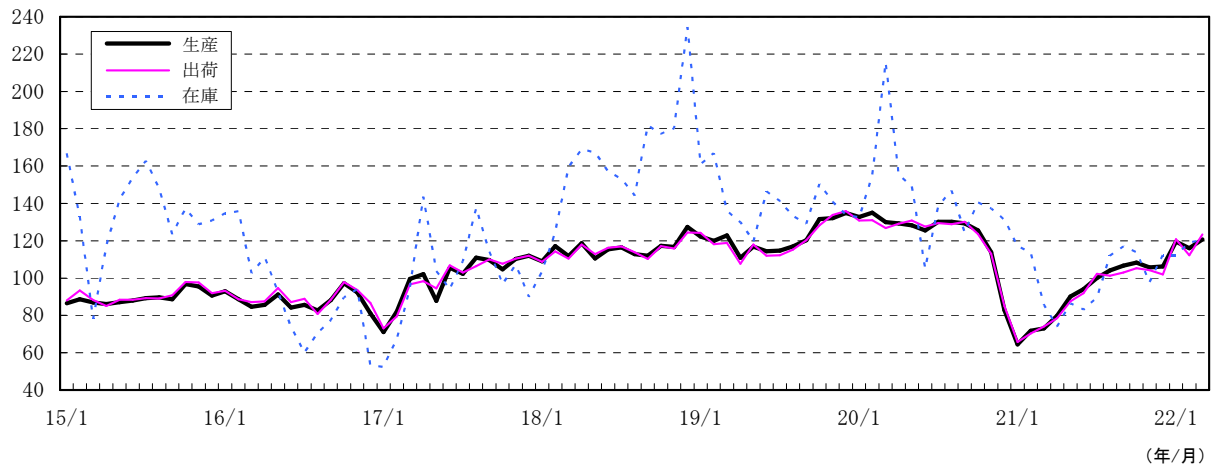
電気・情報通信機械工業（付加価値額ウエイト＝721.2）



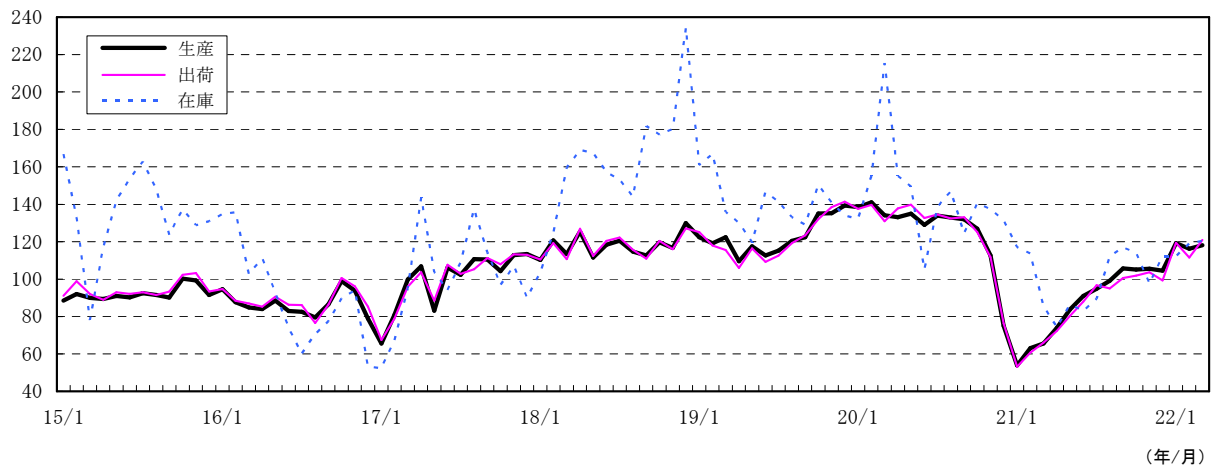
電子部品・デバイス工業（付加価値額ウエイト＝917.7）



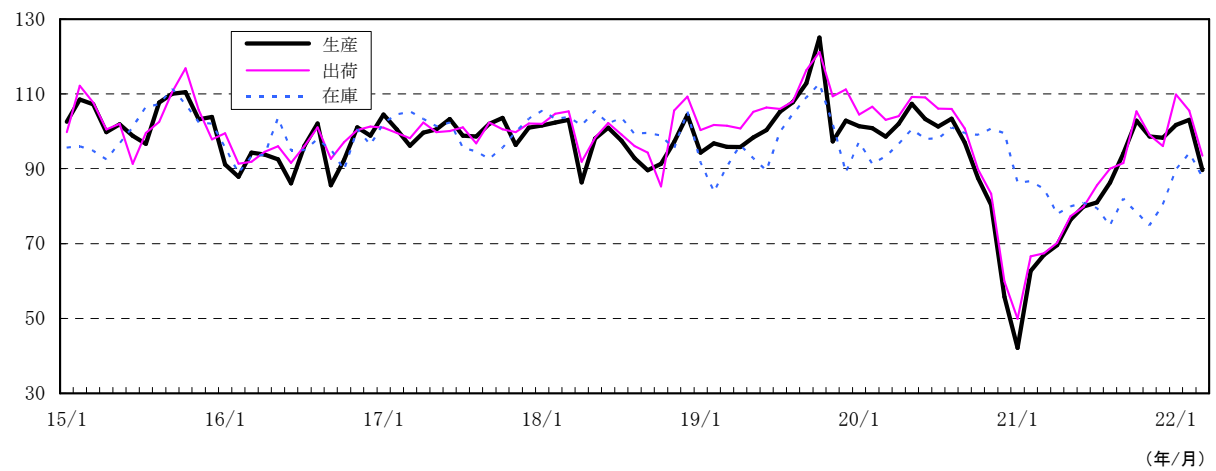
輸送機械工業（付加価値額₁対=1485.3）



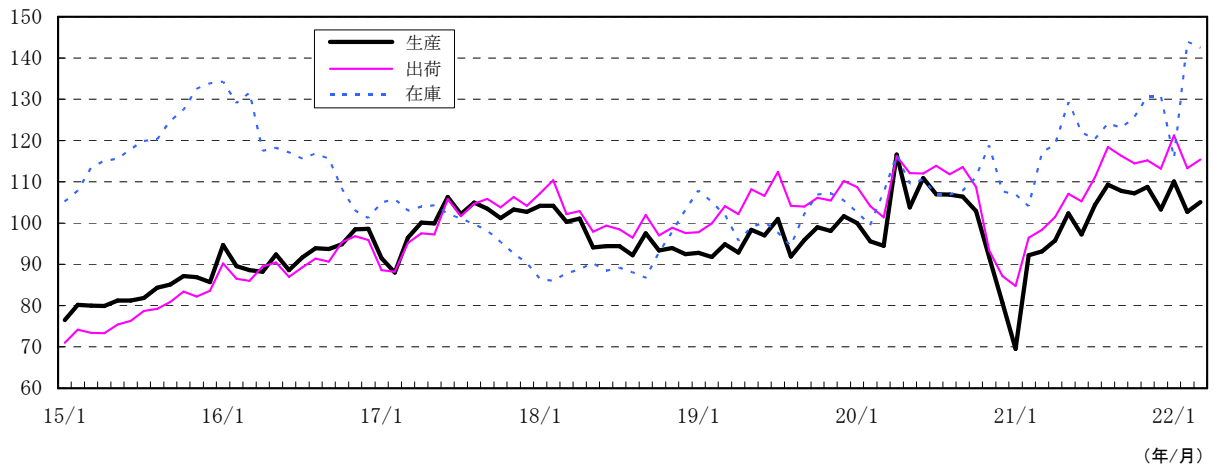
自動車部門（付加価値額₁対=1231.2）



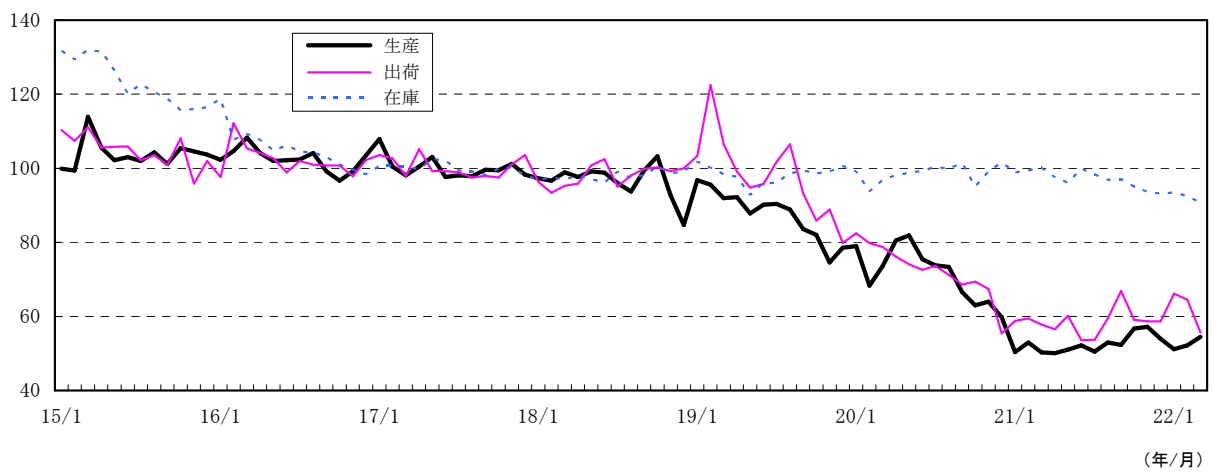
化学工業（付加価値額₁対=408.5）



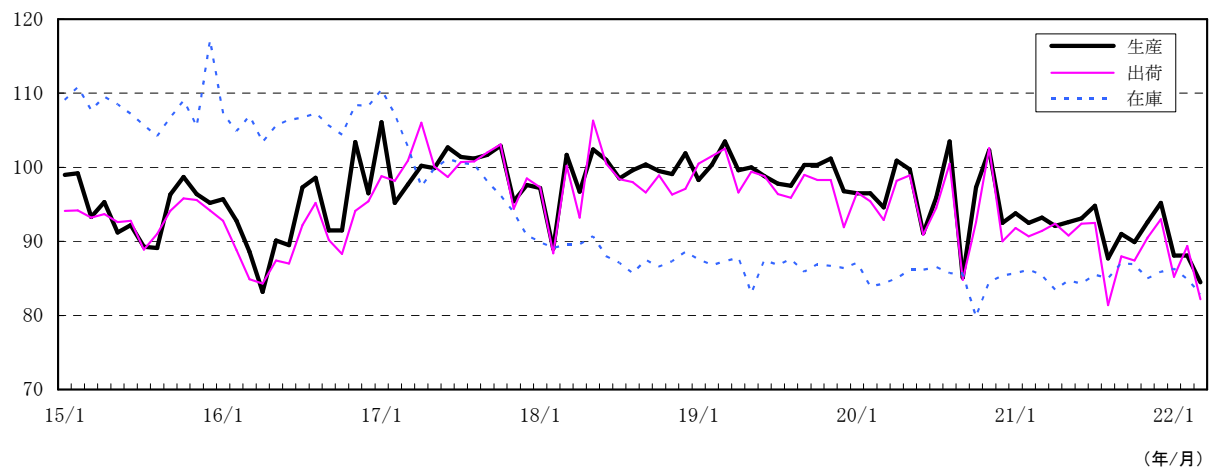
プラスチック製品工業（付加価値額ウェイト=474.8）



繊維工業（付加価値額ウェイト=220.4）



食料品・たばこ工業（付加価値額ウェイト=500.0）



5 広島県、中国地方及び全国における鋳工業生産指数の推移

平成21年を四半期ごとにみると(図8)、広島県、中国地方、全国の全てで、1~3月期は前年同期比で▲30%台(広島県は前年同期比▲39.5%低下)の低下と記録的な急低下となった。4~6月期以降も3期連続して前年同期比を下回ったが、下落率は徐々に縮小し、平成22年1~3月期には前年の反動と、その後の回復を受け、広島県、中国地方、全国の全てで、大幅な上昇でプラスに転じ、広島県においては32.3%の急上昇となった。

図8-1 広島県の鋳工業生産指数の前年同期比の推移

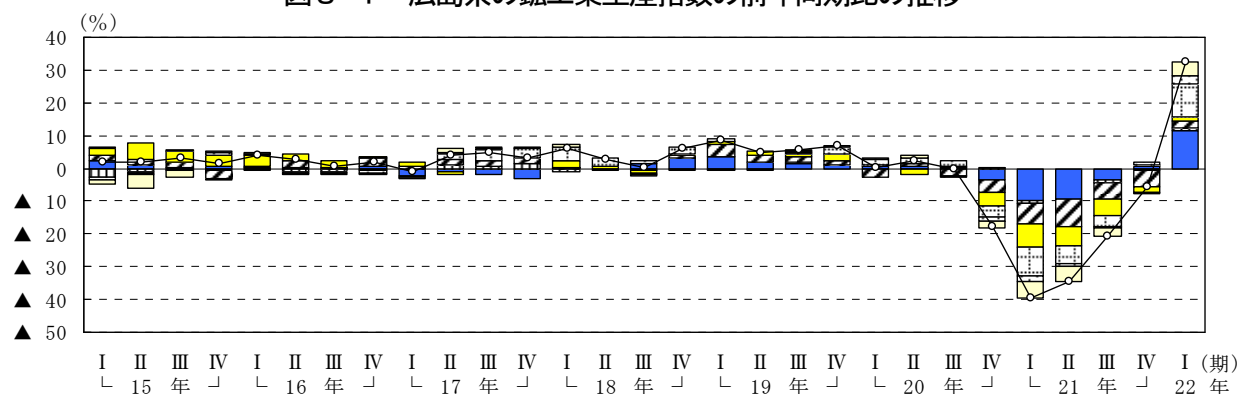


図8-2 中国地方の鋳工業生産指数の前年同期比の推移

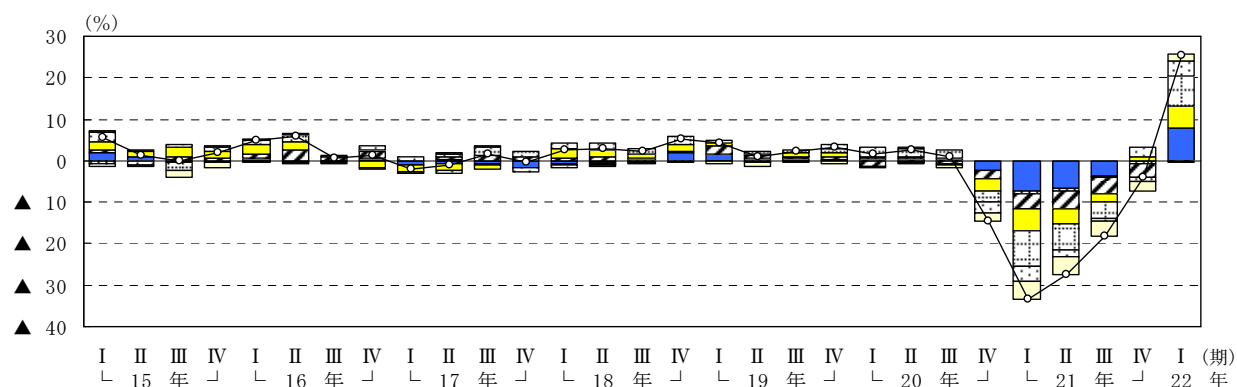
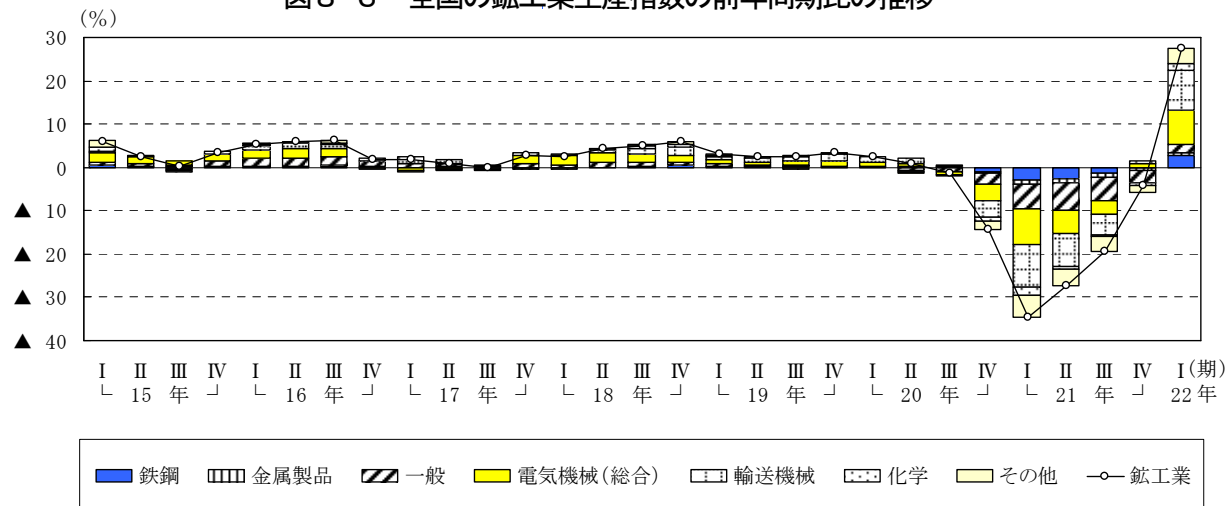


図8-3 全国の鋳工業生産指数の前年同期比の推移



出所: 中国地方…「中国地域鋳工業生産動向」(経済産業省中国経済産業局) 全国…「鋳工業生産・出荷・在庫指数」(経済産業省)

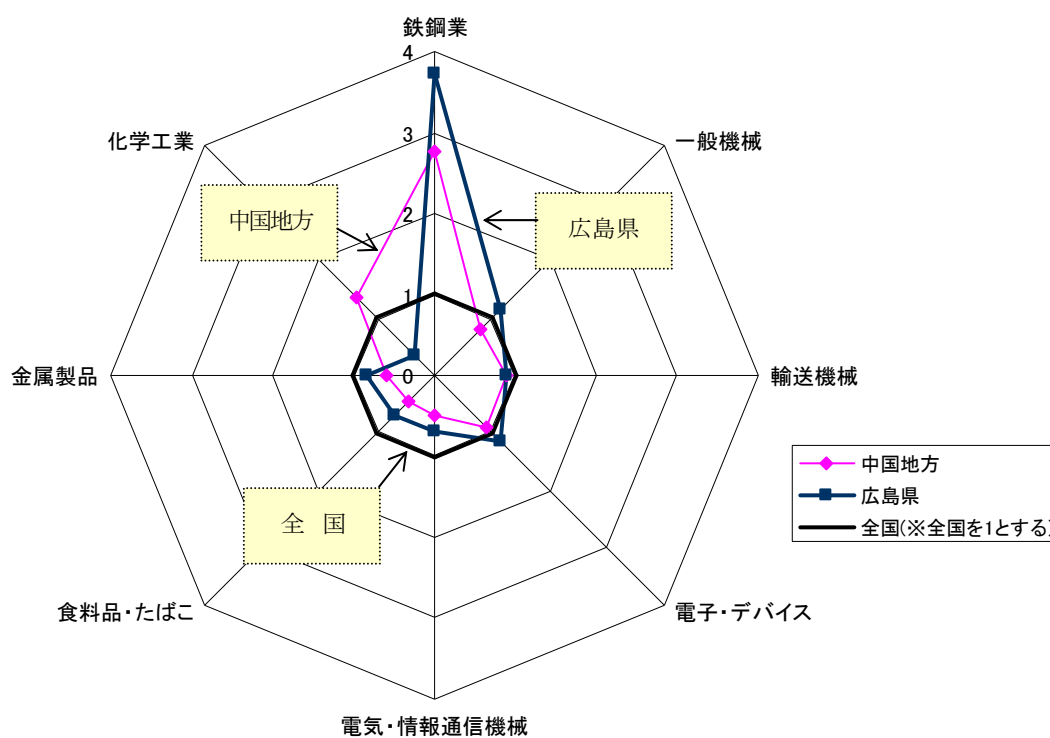
平成 20 年秋以降の世界的な不況は、全ての業種に影響を与え、鉱工業生産指数の急低下を及ぼしたが、その後の回復を受け、世界的な不況前の 8 割程度まで回復した。

参考 鉱工業生産指数の付加価値額ウェイト（平成 17 年基準）について

特化係数^(注)を用いて、広島県の産業構造が、全国や中国地方と比較してどの程度の偏りがあるかみてみると（図 9）、全国との比較では、鉄鋼業への特化の度合いが、極めて大きい一方、化学工業への特化の度合いが小さい。中国地方との比較では、化学工業を除いて各業種の特化の度合いは、相対的に全国に近くなっている。

図 9 主要業種における広島県及び中国地方の特化係数

（各特化係数は、平成 17 年基準の付加価値額ウェイトにより算出）



(注) 特化係数 = 各地域の構成比 ÷ 全国の構成比

（特化係数が 1 を超えると、その地域においてその業種の構成比が全国平均よりも相対的に高いことを表し、特化係数が 1 を下回ると、その地域においてその業種の構成比が全国平均よりも相対的に低いことを表す。）